

ニュース

又 信

又信会会長就任ご挨拶



又信会会長

対馬 健三

このたび五月の又信会総会におきまして、小川会長の後任として会長を拝命致しました経済学部（20回）昭和47年卒業の対馬健三です。

昭和23年、さぬき市志度町に生まれ、一年後高松市に移り住み香川大学附属小学校、附属中学校を卒業し、私の学校生活のほとんどを香川大学に育って頂いたと感謝しています。その恩に報いる意味でも香川大学、又信会の為に何かお役に立てればと心しております。

大学在学中は「三浦ゼミ」で学び、クラブ活動はバレー部に所属し、4年間部活三昧で過ごしました。4年生の時には四国大会で7年ぶりに優勝しました。大学卒業後は、松下電器産業（株）に入社し京都に配属され、松下幸之助さんの引退する時期に勤務することができ、経営理念、ものの見方・考え方など多くの事を学ばせて頂きました。

その後、結婚を機に高松に戻り、父が創業した家電店を引き継ぎました。大学の北側にあるコープの横にエディオン扇町店など、高松市内

令和3年8月20日発行

第 48 号

発行 かい
又 信 会〒760-0016 高松市幸町2-1
香川大学経済学部内
電話087-831-2597
メール yuusinkai@mc4.seikyoeu.ne.jp
郵便振替口座 徳島01690-6-13285

およびその周辺で6店舗営業しています。3年前に社長を息子に引き継ぎ今は会長職です。

仕事が自営業で時間の融

通のきく仕事だったので、仕事以外にPTA会長や高松青年会議所理事長、ロータリークラブ会長など様々な活動を経験しました。趣味は旅行とボランティアですが、中でも26年前の阪神大震災や11年前の東日本大震災の時にうどんの炊き出しに行った事や、軍事クーデターのおきる前のミャンマーの孤児院への支援ボランティアに3度行った事などが貴重な体験でした。

さて、本校は大正13年4月高松高商として開校（又信会は昭和2年4月発足）以来卒業生は本科・経済学部23, 571名、法学部6, 739名、商業短期大学部3, 330名：合計33, 640名にのほり、卒業生は全国各地、各界において活躍されています。その同窓会であります又信会の伝統を守りつつ、更なる発展をさせることが会長としての私の使命だと考えます。

昨年2月からの新型コロナウイルスの感染拡大により、ほとんどの行事が中止になり思うように動けない状態ですが、又信会の活性化の為に以下の課題に取り組んで参る所存です。

一、会報「又信」の刷新

毎年冬に発行される会報「又信」ですが、

サイズがA5の為、字が小さくて読みにくいという声が多くあります。本年12月発行の「又信（第101号）」から刷新すべく、本年7月に「会報又信見直し」検討委員会を設置し、A4サイズへの拡大、表紙デザイン、中味の構成などを検討中です。

二、会員増強の為に「学年幹事」を新設したい
今年の4月末に鳥取県在住の木村恒男様（本22回卒）より、前会長宛に「会員増強をせよ」との叱咤激励のお手紙を頂きました。

又信会の役員も年々高齢化が進んでいます。組織の若返りの為にも学年幹事設置に組みたいと思っています。

三、会費納入者を増やす

又信会の年会費は年間2,000円ですが、ほとんどの方が複数年分を振込んで頂いています。昨年は1,322名の方より総額5,435千円を納入して頂きました。その年の会員で換算すると、約3,000名の方が納入して頂いたこととなります。会費納入の意識を高める意味で、会報又信の中に会費納入者のページを作ることにも検討したいと思っています。

四、現役学生への支援

昨年コロナ禍による授業のオンライン化により、実際の授業がなくなりアルバイト先も無く生活が困窮する学生を支援する目的で、大学が計画した緊急学生支援に又信会として300万円を寄付致しました。

今年になって学生の状況は少し良くなっていますが、香川大学全学部の同窓会組織である香川大学交友会として学生に対し、お昼の弁当500円を100円で販売するなどの支援を行っています。

五. 創立100周年記念行事への準備

2年後に経済学部創立100周年を迎えます。大学当局と連携し「100周年準備委員会（仮称）」の設置を検討して参ります。

六. 又信戦歿学友慰霊之碑の庭の入口に門柱を建立
経済学部創立90周年記念事業として、榊元会長、山崎元副会長ほか特別委員会のメンバーを中心に準備され、多くの会員の寄付により「又信戦歿学友慰霊之碑」が建立されました。

特に末廣春海様（本19回）は、会報「又信」に「慰霊碑の尊厳を守ろう」と寄稿され、慰霊碑の庭の整備と門の設置を強く要望されましたが、残念ながら本年7月に急逝されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

今年度、庭の入口に慰霊碑と同じ庵治石で石柱を設置することに決定致しました。庭の木々の剪定などの維持管理も大学当局と協議の上、適切に行なって参ります。

七. 各支部への支援金を支給

かねてより各支部から支部支援金の要望が出ていましたが、支部活動の支援として支部総会を実施した支部に対し、総会出席者1名当り1,000円の支援金（上限1支部10万円）を支給することになり、本年度総会で決議されました。支部活性化の一助になればと願っています。

以上、申し述べましたが、副会長・常務理事・理事など役員の皆様方にご協力を頂きながら、伝統ある又信会を開かれた活発な組織になるよう、前進して参りたいと思います。

最後になりましたが、会員の皆様方には、より一層のご支援ご協力をお願いしますと共に、皆様方の益々のご健勝ご多幸を心より祈念申し上げます。

トンネルの向こう



経済学部長

佐藤 忍

新型コロナ感染症に翻弄された昨年度の1年間、は、ほぼ、まるまる、遠隔講義となりました。初めての経験でしたが、とにかく大学教育をストップさせないということに全力を注ぎました。教職員も、学生も、大変な1年でした。日本の大学はどこも同じ状況でした。キャンパスは人目のない、静かな空間になりました。とくに新入生には、しかし気の毒な1年でした。想像していた大学とはまったく違う状況でしたから、無理ありません。上級生には新しい経験として受け止めてくれたと思いますが、新入生にはかわいそうな1年でした。

経済活動はサービス業を中心に大きく収縮しました。学生のアルバイトにも影響が及び、生活に困窮する学生も多く現れました。そうしたなか、又信会から香川大学に300万円ものご寄付が提供され、生活に困窮する香川大学生100人が救済されました。又信会という同窓会の存在感が発揮されました。改めて、お礼申し上げます。

昨年は、すべてがはじめてのことでしたので、シヨックも大きかったわけですが、2年目となる今年は昨年度の経験を生かさなければなりません。どこの大学も本来の対面式の授業に戻せうとしました。その矢先に、変異型が登場し、3回目の非常事態宣言や、まんえん防止重点措置が発令されてしまいました。関東、近畿など大都市圏の大学は早速、ふたたびオンラインに

戻る羽目になりました。

香川大学は、新年度を迎えて、なんとか、対面式に踏みとどまって来ましたが、学生たちもその僥倖を素直に受け止め、精一杯、学生生活を満喫していたようです。昨年までと違って、キャンパスは歩くスペースもないほど、自転車が目立ちました。否応なく、若者がキャンパスに戻ってきたということも教えてくれました。若い学生たちとの格闘（という教育）がまた、いよいよ始まるぞと、気持ちを新たにさせてくれました。困ったことも発生させるのですが、それはそれでいいのだと、自分にも言い聞かせながら、対面式の大学生活を再出発しました。にぎやかな学生が、教室に、キャンパスに溢れ、そしてまた、いろんな問題も次々と生起する、そうしたキャンパスが大学らしさですから。

ところがゴールデンウィーク前あたりから、学生のなかに感染が広がっている事実が判明しました。急遽、香川大学危機対策本部において、感染防止特別措置が決定され、連休明けの5月6日（木）から6月8日（火）の間、オンライン講義に切り替えることになりました。

対面式を年度当初のわずか1か月で、断念せざるを得ないとの判断は、大変、辛いものでした。もちろん変異型の出現による予想外の影響もありました。しかしそれ以上に、感染拡大に対する危機感が希薄になっていったという面も無視できないでしょう。それは学生の側の問題であるだけでなく、大学構成員の間の情報共有の日常の問題でもありました。いわば戦場のなかから共有できていなかったということも反省せざるを得ません。そこで、このときから、香川大学生の感染状況について、感染者数の総計、

月別推移、感染機会、感染場所、感染原因等の情報を、学内において、学内限定で、情報開示し、構成員の自覚ある行動を促すように工夫することになりました。

感染状況の学内外における鎮静化を踏まえ、第2クォーター開始時（6月9日）から対面授業が再開されました。対面再開とはいえ、感染予防のための教室定員を超える受講者がいる授業については、オンラインとの併用が実施されています。いわゆるハイブリッド型、あるいはハイフレックス型と呼ばれる授業形態です。2年前であれば、想像もできないような授業のやり方です。いまやそうした授業を普通にこなせていることに、驚嘆します。Zoom等の新技術を駆使しうる日本の大学の、教職員の柔軟性は、見事なものだと思います。

新型コロナウイルスの感染拡大、医療ひっ迫との闘いにおいて日本の政治経済や国民生活は疲弊の最中にあり、にもかかわらずのオリンピック・パラリンピックの開催は、明らかに無理があるわけですが、国際的にも避けられない状況となっています。開催の是非を議論するタイミングは逸してしまつたようです。開催の方法と規模、そして感染拡大の危険な兆候が察知されたときの危機対応に議論が集中しています。きわめて異常な事態のなかの祭典であることは明白です。日本の統治能力が国際的な衆目の監視に晒され、試されているといつてよいでしょう。

こうした状況の中で、ワクチン接種が急加速しています。香川大学でも、職域接種の一環として、全学生、全教職員を対象とし、ワクチン接種を実施することが、決定されました。実施期間は、7月中旬から1回目、8月中旬から2回目接種の予定となっています。また香川大学

を会場とした集団接種も同じ時期に実施される運びとなっています。

昨年当初からの新型コロナウイルスの感染拡大に怯えながら、しかし対抗しながら、レジリエントな教育活動を試行錯誤のなかで模索し、追求してきた大学にも、ようやく、出口が見えてきたようです。明けない夜はないということでしょうか。いまやアフター・コロナの構想について様々な絵模様が描かれはじめています。

ちょうど私の経済学部長としての任期も、9月末が終点です。ご覧の「ニュース又信」（48号）が発行される8月中旬には、次期経済学部長がすでに決定しているはずですが、この原稿を書いている現在（7月上旬）は、各学部から推薦された複数の学部長候補者が所信表明書を作成し、7月下旬の学長・理事面接に備えている段階です。経済学部の学部長選考規定は連続2期4年を限度としています。そしてまた同時に、私は今年度末をもって定年を迎えます。私のキャリアにもやつとトンネルの向こうが見えてきたわけです。

又信会の各支部総会で皆さんに直接ご挨拶し、申し上げるべきところですが、コロナ禍のため、それも叶いません。まだわずかの任期を残していますが、これまで4年間にわたって、私のような非力な学部長を辛抱強く、ご支援してくださった皆様方に、この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

本当に、ありがとうございます。



コロナ禍の想い（続き）

法学部長

三野 靖



コロナ禍も2年目をむかえているが、2021年度の4月当初は、授業も対面方式が基本となり、サークル活動も再開され、学生たちの姿・声もキャンパスに戻ってきた。しかし、5月の連休前になり学内の感染者が増加してきたため、6月初旬まで遠隔授業に切り替えざるを得なくなった。その後は、対面方式に戻っているが、まだ先は見通せない。大学でのワクチン接種も計画はされているが、本稿執筆時点（7月初旬）では、全国的なワクチン不足との報道もあり、流動的なようである。

さて、コロナ禍の1年については、昨秋頃までの状況については、これまでの又信会のニュース等で触れてきたが、あらためて振り返ってみたい。

筆者のゼミ（3年）では、毎年、自治体の政策課題について、班ごとにテーマを決めて、現状、制度、課題等について調査研究をする実践的な活動をしている。コロナ禍以前は、現地調査等のフィールドワークやヒアリングなども実施してきたが、昨年度は、それらの活動は制限せざるを得なかった。しかしながら、例年実施してきた総務省四国行政評価支局とのコラボレーションによるカレッジ・ミーティングは、対面と遠隔を併用することにより実施できた。学生たちの調査研究のプレゼンテーションに対して同局の職員の方から講評を受ける形であるが、講評について、同局と大学を遠隔でつない

で実施した。国の官庁との遠隔授業であるため、セキュリティはもとより、通信環境等、種々の課題があるなかで何とか実施することができた。新聞やテレビのマスコミにも取り上げられ、双方にとって試行的ではあったが、コロナ禍における新たな取り組みの足掛かりになった。

そのなかで感じたことは、学生はもとより、同局の職員の方も若手を中心に、運営したことの意味である。通常、学生と公務員となるとどうしても敷居が高かったり、年齢や経験によるギャップがあつて、議論がかみ合わなかったり、学生はもっぱら受け身になってしまうおそれもあった。しかし、くしくも情報通信技術を活用した双方向の遠隔ゼミは、その敷居を低くしたといえる。デジタルデバイスがない空間が立場や環境を超えてできたことを実感した。コロナ禍前は、一研究者として、法学部長として、一個人として、全国を飛び回っていた。毎週、どこかへ出張したり、複数の出張を兼ねたりするということも普通であつた。昨年度は、学会、会議、個人的な用務等、移動を伴うものはほぼなくなった。特に、学会、会議等は、遠隔開催が当たり前にさえなつてきている。コロナ禍が収まっても、これまでのように一堂に会しての会合は、ほぼなくなるのではないかとさえ思う。なかでも会議は、対面でなければできないものはほとんどない。逆にいうと時間と足を費やして、数時間の会議のために全国から集まる価値などなかったともいえる。コロナ禍が収まっても、少なくとも遠隔併用の会議は標準的なものになるであろう。ただ、遠隔の会議だと議題ごとに各自で取捨選択することができず、対面を実施する場合のように「とりあえず聞いておく」ということがなくなり、まさに、

会合の中身と質が問われることになろう。

一方、個人的な用務では、逡巡することが多々あつた。私事をお許しいただきたいが、この一年あまり、父の他界・葬儀・法要、長男・次男の結婚、恩師の逝去、人生の節目の連続であつたが、いずれもコロナの影響を避けられなかつた。延期、縮小、断念：人の人生の節目に十分なことができず、心を痛めた。特に、周りに迷惑をかけないように父の死を秘匿しながら勤務せざるを得なかつたときは、心身とも疲弊した。また、恩師のお別れの会も開けていない。冠婚葬祭のあり方が急激に変わっていく様をまさに実感・体験した。決して、いい経験になつたとはいえない。人生の節目は、人と人が会つて交流することによって、その意味と空間・時間を共有できるものであろう。

次稿を執筆しているときには、又信会の皆さんともお会いできることを祈っています。

